

『夜』と「新たな言語」

堀 畑 正 樹

はじめに

一度読んだら忘れられない作品がある。そのような作品のひとつがエリー・ヴィーゼルの『夜』である。この作品ほど衝撃を与え、同時にその衝撃を和らげる機能を備えた作品も珍しい。このことは、『夜』が第一級の文学作品であることを証ししている。

しかしながら、『夜』はそうやすやすと手が出せるような作品ではない。圧倒されるばかりで、どう論じてよいか全くわからない。そればかりか、そもそも自分にこのような作品を論じる資格などあるのかとさえ自問せざるをえなくなる。こうして月日がどんどん経つうちに、この作品に取り憑かれた読者も、この作品を論じることを断念してしまう。

そのようなときに、2007 年、まるで読者の心を見透かしたかのように、『夜』の新版が出版されたのである。そしてこの新版には、再録されたモーリヤックの序文のほかに、著者自身による序文が添えられており、その内容は逡巡する読者にとって、きわめて貴重なものであった。ヴィーゼルが生涯で一冊だけ書くとしたら、それは『夜』であったこと、『夜』という本が背負った運命、アウシュヴィッツを取り巻く状況の変化、新版を出すに至った経緯などに言及がなされるうえに、この作品に再度向き合うように読者を鼓舞し、背中を押してくれるからである。

『夜』の本文を論じるに先立って、まずこの序文を検討することから始めよう。

第 1 章 2007 年版に付された序文

文庫版 200 ページの本にしては、かなり長い序文であり、15 ページに及ぶ。引用文に短いコメントを添えて、その要点を記せば、以下のようになるだろう。

① 「私が生涯で一冊だけ本を書かねばならなかったとしたら、それはこの本だろう」⁽¹⁾——読者の思いも同じである。『夜』以降にヴィーゼルが書いた 35 作品は、ヴィーゼルの作家としての成長を示すものであるとしても、彼が書かねばならなかった唯一無二の作品はまちがいに『夜』だろう。非現実な現実、悪夢を超える現実を生きなければならなかった人間にしか、しかも起きた悲劇の理不尽さにたいする憤怒と証言する使命感がなければ書けぬ作品だろう。

② 「ある読者は、私が生き残ったのは、この本を書くためだったと言う。その確信は私にはない。私はどうやって生き残ったのかわからない。[……] だから私は偶然にしか感謝することができない。しかしながら、生き残った以上、私の生き残りにある意味を与えるのは私の務めだ」⁽²⁾——ヴィーゼルはアウシュヴィッツからの生還を神が行った奇跡とはせず、偶然の為せる業だとする。教会堂の堂守りモシェ・ル・ブドーを信仰の師と仰ぐ敬虔な少年であった『夜』の主人公エリエゼールは、悲劇を生き抜くなかで、神への信仰を失う。2007 年版にも再録されたモーリヤックの序文は、少年に起きた信仰の喪失、この一点に力点を置く。少年

に起きたことは、実際にエリー・ヴィーゼルに起きたことなのか？ エリエゼールとエリーを重ね合わせるべきか否かの判断はむづかしい。

③「私にわかっているのは、この小さな著作がなかったら、私の作家人生、あるいは私の人生そのものが現在あるものになっていなかったらということだけだ。つまり、証人としての人生で、敵が彼らの罪を人類の記憶から消すことによって、死後の勝利、最終的な勝利を勝ち取るのを妨げることを、道義的に人間として、自分の義務と考える証人の人生である」⁽³⁾——これはやはり『夜』にこそエリー・ヴィーゼルのすべてがあるということだろう。何のためにこの本を書いたのかわからなかったとしても、この本だけは書かざるをえず、そしてこの小さな著作が彼の人生を決定づけたのであろう。

④「換言すれば、ヒトラーとその手下がユダヤ民族にしかけた戦争は、ユダヤ教、ユダヤ文化、ユダヤの伝統、すなわちユダヤの記憶をもターゲットにしていたのである」⁽⁴⁾——ヒトラーたちがユダヤ人の殺害だけを目論んだのではなく、ユダヤ人の存在そのものを歴史から消そうとしたというのだが、果たしてこのようなことが現実的に可能なのだろうか。『夜』の本文のなかで、シゲットのユダヤ人の住民が同じような問いを発していることに留意すべきだろう⁽⁵⁾。ヒトラーたちの企ては実際に実行に移されたのである。

⑤「私には言うべきことが有り余るほどあった。しかし、それを言うための言葉がなかった。私の使用する言葉の貧弱さを思い、私は言葉が障害になるのがわかった。別の言語⁽⁶⁾を発明しなければならなかった。敵によって裏切られ、買収され、墮落させられた言葉をいかにして復権させ、人間的なものにできるのか？ 飢え、渇き、怖れ、輸送、選別、火、煙突：これらの語はあるものを意味している。しかしあの当時は、これらの言葉は別のものを意味していた。

私の母国語—母国語も傷ついていた—で書きながら、私は一文ごとに立ち止まった、「そうじゃない」と言いながら。私はやり直した。ちがう動詞、ちがうイメージ、ちがう沈黙の涙を使って。やっぱりダメだった。だったら「それ」とは、何なの？ それは盗まれたり、横領されたり、冒瀆されないように、逃れ、身を隠すものなのだ。辞書にある既存の言葉は痩せて、貧弱で、青ざめたものに思えた。封印された貨車で未知への最後の旅を語るのに、どのような言葉を使うのか？ 非人間的であることが人間的であり、制服を着た躰のよい教養のある人間が殺しに来る一方で、啞然とした子供たちと疲れ切った老人たちが殺されるためにやって来る、錯乱した冷たい世界の発見を語るには、どういった語を使うのか？ 炎に包まれた夜の別れ、あらゆる絆の断絶、一家族、一共同体全体の破壊を語るには？ アウシュヴィッツに到着したその夜に、母親と一緒に殺された、金髪で悲しげに微笑むユダヤ人のおとなしくて美しい少女の死を語るには？ 手が震えることなく、心が永久に張り裂けることなしに、どうしてこれらのことを思い起こせようか？

心の底では、現在でも時折そのことを思い知るように、証人の証言が受け入れられないことがわかっていた。アウシュヴィッツを経験した者だけが、それが何であったかを知っている。ほかの者はそれを知ることは決してないだろう⁽⁷⁾——序文のこの一節こそは、『夜』の核心部分に触れている。この一節は何度読み返してもわれわれに何かを訴えかけ、そして圧倒する。われわれの世界には、表現しようとしたら必ずや冒瀆にならざるをえないものが存在するということだ。

⑥「しかしながら証人は心の奥底で、語ることは不可能なほど困難であるが、あの状況で口をつぐむことは許されないことがわかっていた。

だから粘り強く続けなければならなかった。

そして言葉なしで語らねばならなかった。言葉に宿り、言葉を包み、言葉を超える沈黙を頼りにしなければならなかった。しかも、かの地ビルケナウのひとつかみの灰のほうが、あの呪いの地についてのあらゆる言説よりも重いという気持ちを持ちながら。というのも、言語を絶することを言うための私のあらゆる努力にもかかわらず、《それは相変わらずそうじゃない》からである」⁽⁸⁾——表現を拒む「それ」を言うことは、いかに困難をきわめたかということだろう。それでも『夜』の本文のなかに、「それ」を想像させることに成功した文が散在するように思われる。

⑦ 「そのことが、フランソワ・モーリヤック氏のたゆまぬ努力にもかかわらず、原稿がパリとアメリカの大手出版社すべてから拒絶された理由なのか？ 何ヶ月も何ヶ月も経たあとに、個人的な訪問を重ねたのちに、氏はとうとう原稿を売り込んだ」⁽⁹⁾——引き受けたのは、ミニユイ出版社だった。

⑧ 「数え切れないほどの削除にもかかわらず、イディッシュ語のオリジナル版は長い。短くなったフランス語版にさらに手を入れたのは、威信のある小さな出版社「ミニユイ」の伝説的社主ジェローム・ランドンである。私は本文の無駄を削る彼のやり方を受け入れたのは、私は余分に思われるものはすべて怖れたからである。この本では、実質だけが重要だった。私は雄弁を忌避していた。語りすぎることは、舌足らずよりも私を尻込みさせた」⁽¹⁰⁾——ヴィーゼルが何を削ったかという、本の冒頭や末尾に置かれた考察や瞑想のほかに、あまりに個人的な箇所だという。それらは行間に留まっていなければならぬのだという。『夜』はあまりに文学作品、あまりに簡潔すぎるせいか、ヴィーゼルは1994年に『夜』の解説書とも言うべき自伝『すべての河は海に注ぐ』(550ページを超える)を出版する⁽¹¹⁾。

⑨ 「読者が私に問う権利がある別の問題：旧版が45年前から存在するのに、なぜこの新版を出すのか？ 旧版がオリジナル版に忠実でないとか良くないならば、より良質でオリジナル版に近いものに替えるのに、なぜこんなに長く待ったのか？

〔……〕この間に幸運にも、私のほかの著作のいくつかが妻であるマリオンによって訳された。非凡な翻訳家である彼女は私の声を知っており、誰よりもうまくその声を伝えることができる。運よく、ファラルル社のストロース・ジルーに新訳を出すように誘われて、彼女は承諾した。〔……〕彼女のおかげで、ところどころ誤った表現や印象を訂正することができた」⁽¹²⁾——『夜』の第2章の冒頭直後に置かれた、封印された貨車のなかでの出来事を記述した一節で、旧版の《s'accouplaient》(「交接する」)が、新版では《s'attachaient》(「愛撫する」)に換えられているのは、その一例である。

⑩ 「それはそれとして、これほどの歳月を隔てて、この証言を読み返すと、あまり長く待たなくてよかったことに気付く。年月とともに、いくつかのエピソードを一間違って一無意識に疑っていることに気付いたからだ」⁽¹³⁾——ヴィーゼルが『夜』を「証言」価値を持つものと考えていることが窺える。われわれの記憶装置はすぐれたものではあるが、時の侵食は免れない。「昨日のことのようによく憶えている」ことも、やがてリアル感を失う。

⑪ 「この序文を終えるにあたって、それぞれの本には、人間と同じく、固有の運命があるという私の確信を強調しておくことは重要だと思われる。ある本は悲しみを呼び、またある本は喜びを呼ぶ。悲しみと喜びの両方を味わう本もある」⁽¹⁴⁾——『夜』はまさに両方を知る本だろう。

⑫ 「私はすでに、45年前の刊行時に『夜』が遭遇した困難を述べた。好意的な書評にもかかわらず、本は売れなかった。主題は病的なもの

と判断され、誰の興味も引かなかった。ラビが説教のなかでこの本に言及すると、必ず苦情を言う者がいた：「過去の悲しみで子供たちを打ちひしいで何になるのか？」その後、状況は変わった。私の小冊子は私が予想していなかった歓迎を受けている。今日では、特に若い人たちが授業で、大学でこの本を読んでいる。しかも多数である。

この現象をどう説明すればよいのか？ それはまず一般大衆のメンタリティに起きた変化によるものと考えるべきである。50年代、60年代には、戦前あるいは戦中に生まれた人たちが、みすばらしくホロコーストと呼ばれるものにたいして、ある種の無意識で寛大な無関心を露わにしたが、いまや、もはやそうではない。

当時、この問題に関する本を出版する勇気を持つ出版社はほとんどなかった。今日では、すべての出版社がこの種の本を定期的に出版している。[……] このことはアカデミックな世界にもあてはまる。当時、この問題について講義をする中等・高等教育の学校はほとんどなかった。今日では、いたるところで、この問題がカリキュラムに組み込まれている。しかもこれらの授業はもっとも人気の高い授業のひとつとなっている。

今後、アウシュヴィッツのテーマは一般教養の一部をなす。[……] このテーマは避けて通ることのできないものになった。

生き残りの世代が日に日に少なくなってゆくのを意識して、現代の学生や読者は彼らの記憶に夢中になっている。

その起源、その規模の大きさ、その帰結といい、極限的な記憶だからである。私はくり返す：記憶の氾濫は記憶の衰弱と同じくらい有害なのである。両極のあいだで、記憶が真実に近づくことを願いながら、節度を選ぶことがわれわれの務めである。

証人であろうとする生存者にとって、問題は

単純である：その義務は死者と生者、とりわけ次世代のために証言をすることである。われわれには共通の記憶に属する過去を彼らから奪う権利はない。

忘却は危険と侮辱を意味するだろう。死者を忘れることは、彼らをもう一度殺すことであろう。そして、殺人者とその共謀者を除けば、誰も彼らの最初の死に責任はないが、彼らの二度目の死はわれわれの責任だ。

時折、「アウシュヴィッツへの答え」を知っているかどうか尋ねられる。私は知らないと答える。これほどの規模の悲劇に答えがあるかどうかさえわからない。しかし、責任には答えがあることを知っている。

証人がいやいやながらも証言することを選んだのは、それは今日の若者、明日生まれる子供たちのためである：証人の過去が彼らの未来になることを、彼は望まないのだ⁽¹⁵⁾——長い引用になってしまったが、われわれの心に響く貴重な言葉であろう。アウシュヴィッツの問題が学校教育のカリキュラムに組み込まれたことは、フランスのリセの歴史教科書によっても裏づけられる。翻訳だが、手元にあるリセの歴史教科書をつぶさに見ると、教室の現場はわからないにしても、どのような学習がなされているか、おおよその見当はつく。フランスの対独協力の是非をめぐる議論とともに、ナチズムとホロコーストの学習と議論がなされていることだろう⁽¹⁶⁾。また、アウシュヴィッツのテーマが一般教養の一部になった証しとして、ヴィーゼルはアメリカの「ホロコースト記念博物館」を例に挙げている。1993年ワシントンD.C.に開設されて以来、2007年当時で2200万人を超える人々がこの記念博物館を訪れているという⁽¹⁷⁾。

第2章 1958年版と2007年版の比較

『夜』の2007年版（新版）と1958年版（旧

版)の比較を行ってみたい⁽¹⁸⁾。ヴィーゼルの序文がそれを促しているように思われるからである。序文から察するに、重要な変更がいくつかあって、その変更を検証すれば、作品の奥深さが明かされるのではないかと期待される。

結論から言うと、本文の比較照合を通して得られたのは、こまごまとした訂正が204ヶ所あるにもかかわらず、全体として受ける印象は、「作品を左右するような修正がきわめて少ない」ことである。とりわけ、文章の息づかいを反映する句読点の修正がほとんど見られないことに驚かされる。1958年から2007年に至るこの間に、アウシュヴィッツに関するすぐれた研究や、同じ生存者であるプリモ・レヴィらの著作も読んだはずである。当然また、作家としての力量、表現能力も一段と高まっているにもかかわらずである。これは一体なにを意味しているのだろうか？

導かれる結論は、よりよい表現に変えようとする欲求よりも、修正を施してはならない、記憶がまだはっきりしているうちに書いた『夜』が持つ証言記録としての価値を何よりも尊重しなくてはならなくなったのだろうとの推察である。アウシュヴィッツにたいする一般大衆のメンタリティの変化(拒絶から受け入れへ)に伴って、アウシュヴィッツの本質が見誤られることへの懸念と深くかかわっているように思われる。

新旧の比較表(本稿の〔注〕のあとに置く)をより細かく見てみよう。フランス語の綴字法にかかわるものが多数ある。その内訳は、以下のようになる。括弧内は同じ訂正の数を示す。

(1) 綴り字の変更：

Moché → Moshé (11)

Rabbin → Rabbi (1)

Pâque → Pâques (1)

bloc → block (64)

《新版では、強制収容所の区画や囚人を収容

する建物を指す場合は《block》、コンクリートや石などの塊を指す場合は《bloc》を使用している。旧版では、どちらも《bloc》。)

commando → kommando (4)

cabbalistique → kabbalistique (1)

entr'acte → entracte (1)

entr'ouvert → entrouvert (2)

Rabi → Rab (6)

Chlomo → Shlomo (2)

(2) 語頭が大文字になっている語の語頭を小文字にする：

Maître → maître (1)

Fasciste → fasciste (3)

Madame → madame (4)

Juif → juif (3)

Maman → maman (3)

Ange → ange (1)

Foi → foi (1)

Kommando → kommando (1)

Kapo → kapo (13)

N° → n° (1)

Nazi → nazi (1)

(3) 語頭が小文字になっている語の語頭を大文字にする：

jour → Jour (1)

juif → Juif (1)

合計で129あり、全体(204)の63%強である。これらの訂正は、イディッシュ語やドイツ語ではなく、フランス語の綴字法により適ったものにするという方針から来ているのだろう。

残るは75の訂正である。訂正の内容を見ると、便宜上以下の4つくらいに分類することができる。各項目に記載した訂正例は、網羅的でないことをお断りする。

(1) 本文における空白：『夜』のテキストには、物語の区切りを示す空白が多く見られる。新

版で見ると、1行の空きが26ヶ所、2行の空きが34ヶ所、3行の空きが2ヶ所ある。旧版では空きが、新版よりも6ヶ所多い。新版では、話が続いている場合には空きをなくしているからである。妥当な判断だろう。ただし、新版108-109ページにブナ収容所で一緒だった自称フランス人女性とパリで再会するエピソードが挿入されており、このエピソードはタイムラグがあるので、ここは旧版のように空きを設けたほうがよいと思われるが、新版では空きをなくしている。

(2) 旧版における誤植を訂正したもの：

Dommage pour les larmes

→ Dommage pour les autres

dans ses yeux bleus cendrés

→ dans ses yeux bleu cendré

Après qu'on nous eût donné

→ Après qu'on eut donné

nous rentrions de dépôt

→ nous rentrions du dépôt

mon fils./Nous n'avons pas

→ mon fils. Nous n'avons pas

les doigts du pied → les doigts de pied

on eut dit une mascarade

→ on eut dit une mascarade

《条件法過去の代わりに用いる接続法大過去は《on eût dit》のはずだが、新版でも訂正されず、そのままになっている。このようなケースはほかにはない。》

pour qu'elles ne gèlent pas

→ pour qu'elles ne gèlent pas

boitant → boitant

(3) 誤りではないが、より自然なフランス語にしたもの：

Il ferma ses yeux → Il ferma les yeux

une boîte de chocolat

→ une boîte de chocolats

qui régnaient sur le ghetto

→ qui régnaient dans le ghetto

Elle m'avait semblé une éternité

→ Elle m'avait semblé durer une éternité

à notre époque → de notre époque

Les chaudrons furent ramenés

→ Les chaudrons furent rapportés

il inscrivait son numéro

→ il inscrirait son numéro

(4) 記述をより正確にしたもの：

「私は12歳であった」

→ 「私は13歳になろうとしていた」

「生活は通常に戻った」

→ 「生活は「通常」に戻った」

「聖霊降臨祭前の土曜日」

→ 「聖霊降臨祭前の二度の土曜日」

「私は妹を見つめた」

→ 「私は妹を見つめていた」

「若者たちは交接していた」

→ 「若者たちは愛撫し合っていた」

「ヒムラー」→ 「全国指導者ヒムラー」

「子供」→ 「12歳ぐらいの少年」

「翌々日から」→ 「翌日から」

「彼の目は私をじっと見つめた」

→ 「彼の目は据わった」

「退去の2日後」→ 「退去の9日後」

「二人の男が近づいて来た」

→ 「男たちが近づいて来た」

「私は15歳だった」→ 「私は16歳だった」

これらの訂正を見ると、やはり記述の正確さへの配慮が窺える。『夜』は文学作品ではあるが、新版を編むにあたって、歴史的記述としても耐えうるものにするという意志が著者に強く働いたのではないと思われる。

新旧比較の最後になるが、大きな変更として無視できないものに、本の表紙や装丁と活字の違いがある。2007年版に採用されている活字

は、〈Century〉や〈Times New Roman〉に近いもので、多くの出版社の文庫本で採用されており、標準的で特徴がない。1958年版の活字は、やや小ぶりで古めかしく、伝えられないものを伝えるのに相応しい活字に見えてしまう。

旧版の表紙には、肋骨が露わになり、目が異様に大きく見える四人の少年のモノクロ写真が使われている。他方、新版の表紙は、雪が積もったレールと鉄条網と大きな建物を配したカラー写真である。新旧の表紙の変化には、アウシュヴィッツをめぐる状況の変化が色濃く反映しているのであろう。『夜』は特異で、「何か」を秘めた特別な作品なので、旧版の表紙や活字が惜しまれる。

第3章 新たな言語の創出

エリー・ヴィーゼルの、自らの経験を語るには、「新たな言語」の創出が必要だったと言う。くり返しになるが、序文で、ヴィーゼルはこう書いていた。「私には言うべきことが有り余るほどあった。しかし、それを言うための言葉がなかった。私が使用する言葉の貧弱さを思い、私は言葉が障害になるのがわかった。別の言語を発明しなければならなかった。」また、「だから粘り強く続けなければならなかった。言葉なしで語ること。言葉に宿り、言葉を包み、言葉を超える沈黙を頼りにすること。しかも、かの地ビルケナウのひとつかみの灰のほうが、あの呪いの地にかんするあらゆる言説よりも重いという気持ちを持ちながら」とも書く。

『夜』のなかで読者が立ち会える出来事は、われわれの理解をはるかに超えるものだ。体験者であっても「それ」を書くことはいかに困難なものであったかは想像にかたくない。われわれの言語は、われわれの経験に裏打ちされているからだ。ヴィーゼルはいかにして、この言葉の障害に挑んでいったのか? 『夜』には、ヴィー

ゼルが試行錯誤の末に探りあてた〈言葉にならない言葉〉が散在しているように思われる。そのいくつかを取りあげてみよう。

- (1)「私はいくばくかの空気を飲むことができた。」(p. 169)⁽¹⁹⁾

ドイツ側の戦況の悪化に伴い、アウシュヴィッツに送り込まれたユダヤ人たちは、アウシュヴィッツ＝ビルケナウからまず同じポーランド内の北西に位置するグライヴィッツに強制退去させられる。その距離70キロメートルを凍てつく寒風吹きすさぶなか、休みなく走り続けたエリエゼール少年たちは、続出する死を奇跡的に免れて目的地に到着する。バラックに収容される際、少年は押し合い圧し合いしているうちに倒されて、誰かに上からおおいかぶさられて息ができなくなる。ヴィーゼルはそのときの状況をこう語っている。

私の胸にのしかかるこの塊から逃れることができなかった。もしかしたら私が闘っていた人は死んでいたのではないか?

私はそれを知ることは決していないだろう。私が言えるのはただ、私が闘いに打ち勝ったということだけだ。積み重なる瀕死のひとつひとつの壁に小さな穴を穿って、私はいくばくかの空気を飲むことができた。(下線は筆者、以下同様)

空気を「吸う」ではなく、「飲む」(《boire》)になっており、後者のほうが生死を分ける、より切実な表現になっている。

言語は通常、比喩表現に満ちている。言語の本質は比喩にあるとさえ言えるかも知れない。われわれは「死ぬ」という語を使っても、実際には死なないことがほとんどである。それは日本語でもフランス語でも変わらない。《mourir de vieillesse》(「老衰で死ぬ」)は本当に死ぬが、

《Je meurs de faim》(「腹ぺこで死にそうだ」),
《rire à mourir》(「死ぬほど笑う」)は餓死する
わけでも、笑い死にするわけでもない。

ところが『夜』では、言葉は比喩としてでは
なく、文字通りの意味で使われることが多い。
「死ぬ」と言ったら、即、死んでしまう。「空腹
で死ぬ」と言ったら、餓死するのである。「空
気を飲む」は比喩表現ではなく、まさしく空
気を飲んだのだろう。

(2)「このクラウンはいつの日か、何かを買うの
に役立つだろう、パンとか命を。」(p. 106)

アウシュヴィッツから4時間かけて移ったブ
ナ収容所での出来事である。囚人の金のクラウ
ンを抜き取って闇商売をしていた歯医者が捕
まって、エリエゼール少年は寸前のところで奥
歯のクラウンを奪われずに済む。

このクラウンはいつの日か、何かを買うた
めに役立つだろう、パンとか命を。私はも
や日々のスープ、固くなったパンのかけらに
しか関心がなくなった。パン、スープ——こ
れが私の生のすべてだった。私はからだで
あった。おそらくそれ以下だった。飢えた胃
袋。胃袋だけが時の経過を感じていた。

下線を施した表現にもリアリティをもって迫
るものがある。「命」にも「パン」と同様に部
分冠詞がつけられ、言語的にこの二つが同等に
置かれている。普通、われわれは命をつなぐた
めにパンを食べる。パンと命は同等ではない。
しかるにアウシュヴィッツの囚人の世界では、
命とパンは同等で売り買いの対象なのである。

他方「私は肉体であった。おそらくそれ以下
だった。飢えた胃袋」のほうは、たとえば大岡
昇平の『野火』にありうる表現である。苛酷な
現実を表すものであるが、表現としては既存の
範疇に属するだろう。

(3)「われわれは自然の、世界の支配者だった。」
(p. 158)

(1)で見たように、ソ連軍の侵攻、米軍の空
爆によって退去を余儀なくされて、アウシュ
ヴィッツからクライヴィッツへの70キロにお
よぶ道のりを走破したときのことである。死者
の続出が想定されており、これらの退去は「死
の行進」と呼ばれている。

終わりのない旅。[……] 親衛隊員は疲れ
たら、交代した。われわれは、われわれには
替えはなかった。走っているにもかかわらず、
手足は寒さでかじかんで、喉が渇き、飢
え、息切れし、われわれは走り続けた。

われわれは自然の、世界の支配者だった。
われわれはすべてを忘れていた、死、疲労、
生理的欲求。寒さや飢えよりも強く、発砲や
死への欲求よりも強く、断罪されて流浪の身
となり、番号にすぎないわれわれだけが世界
における人間であった。

この一節のどこに新しさがあるのか？ それ
は逆説による新しさだろう。この「支配者」と
いう大言壮語には滑稽さがみじんもない。極度
の栄養失調状態で、手術したばかりの靴が履け
ない右足をぼろ布でくるみ、しかも飲まず食わ
ずで、寒風吹きすさぶなか、70キロを走る、
眠ったままでも走る、とつくに疲労の限界を超
えて走るマシンと化す——それでも生き残った
人間がいたとは、偶然にしても奇跡に近い。人
間には人間を超える能力が備わっているのだろ
うか？ まるで、極限状態にある人間のほう
が、健康状態の良い人間よりも耐性にすぐれて
いるかのようなのである。われわれはある一定の自
然環境のもとで、自然に支配されて生きている。
しかるに少年たち生存者は、厳しい自然環
境だけではなく、人間の生理や人間の生死をも
超越する。このような存在は超人でなくてなん

であろう。その超人が、「われわれだけが世界における人間」であることを誇ったとしてもなんの不思議があろう。その彼らが番号に貶められた囚人であるのだから、逆説と言うほかないだろう。ただし、この超人としての誇りの裏側に、本当の世界の支配者たる神を喪失した深い悲しみと虚無感が潜んでいることを見逃してはならないだろう。『夜』には何度か、キーワードであるかのように、《orphelin》という語が現れる⁽²⁰⁾。この「孤児」とは、辞書の「両親のいない子」よりも広義で、「見捨てられた人々」を指し、「神なき子」の意味にもなる。

(4)「それともあれは幻覚だったのか？」(p. 170)

『夜』には、現実だったのか、それとも幻覚だったのか、エリエゼール少年にも読者にも判断のつかない部分がある。しかもこのエピソードが、『夜』のもっとも美しい忘れられない箇所である。「新たな言語」なのかどうかもわからない。また、ネルヴァルやプルスがすでに開拓した領域、手法かも知れない。とにかく、『夜』を象徴する一節であり、(1)の直後に続くエピソードである。押し合い圧し合いのさなか、押し倒されたエリエゼールの下で偶然にもブナで一緒だったジュリエクの声がしたという。死者と生者が折り重なっている状況下で、そのジュリエクが唐突にバイオリンの話をする。そのときである、エリエゼールは何者かに上からのしかかられて息ができなくなるのは。必死にもがいて「いくばくかの空気を飲んだ」あとに、あろうことかバイオリンの音が聞こえてくるのである。

ジュリエクだったに違いない。彼はベートーヴェンのコンチェルトの一節を弾いていた。私はそれまでにこんな純粋な音を聞いたことがなかった。このような静寂のなかで。

彼はどのようにして抜け出ることができたのだろうか？ 私にわからずに私の体の下からどのように抜け出たのだろうか？

真っ暗だった。このバイオリンだけが聞こえていた。まるでジュリエクの魂が弓のようだった。彼は彼の人生を奏でていた。彼の人生すべてが弦の上を滑っていった。彼の失われた希望、灰にされた過去、消え失せた未来。彼は決してもう奏でることのないものを奏でていた。

〔……〕今日なお、ベートーヴェンの演奏を聞くと、私の目は閉じられ、すると闇のなかから、死んでゆく人と死者の聴衆にバイオリンで別れを告げるポーランドの友人の青ざめた悲しい顔が浮かんでくる⁽²¹⁾。

(5)「決して私はあの夜を忘れない」(p. 78)

『夜』の第3章には、《Jamais je n'oublierai》(「決して私は忘れない」)で始まる7つの文が置かれており、最後に一語だけの《Jamais》で締めくくられている。エリエゼール少年にとって、この誓いは、望むと望まないにかかわらず、決して破ることのない未来永劫変わらぬ誓いであろう。

決して私はあの夜を忘れない、私の人生を長い、七回門をかけた夜にした収容所最初の夜を。

決して私はあの煙を忘れない。

決して私は忘れない、黙った青空に渦を巻いて立ちのぼる煙になった子供たちの幼い顔を。

決して私は忘れない、永久に私の信仰を焼き尽くしたあの炎を。

決して私は忘れない、生きたい欲求を永久に私から奪ったあの夜の静寂を。

決して私は忘れない、私の神と私の魂と砂漠と化した私の夢を殺したあの瞬間を。

決して私はこれらのことを忘れない、たとえ神と同じだけ長く生きさせられたとしても。決して。

《Jamais je n'oublierai》という表現パターンに新しさはない。新しさは、誓いにある。誓いは破られる。しかしこの7つの誓いは少年が死ぬまで破られることはないだろう。「自己保存本能」⁽²²⁾さえも失った人間の誓いであるからだ。

(6)「しかし、それでも私は幸福だった。」(p. 118)

エリエゼール少年たちはアウシュヴィッツから歩いて4時間の距離にあるブナ収容所に移されていた。そのブナがアメリカの飛行機による空爆を受ける。ブナには大きなゴム工場があったからだ。空爆は囚人たちを怯えさせるどころか、歓喜で満ちたのである。

われわれは誰も怯えてなどいなかった。しかしながら、もし爆弾が収容所の区画に落ちていたら、一度で数百人も死者が出ただろう。しかしわれわれはもはや死を怖れてはいなかった、とにかく空爆による死は。爆弾が破裂するたびに、われわれを歓喜で満ちし、われわれに生きる喜びを与えた。

空爆が、空爆による死がエリエゼールらに生きる喜びを取り戻させる。『夜』の冒頭で暗示される、かつてのシゲットの町での幸福な少年の日々を除けば、『夜』全篇に漂うのは、恐怖、疲労、飢え、渇き、暴力、怒りである。唯一、囚人たちが歓喜に包まれ、生の喜びに沸くのは、空爆を受ける場面である。

全員が建物から外に出た。われわれは胸一杯火薬と煙でいっぱいの空気を吸った、われわれの目は希望で輝いていた⁽²³⁾。

エリエゼールがなんとしても抗おうとする死と、生の喜びさえ感じさせる死との対立が、これらの一節の新しさをつくっている。

この『夜』のテキスト分析をここで、すなわち囚人たちの生きる喜びの蘇生で締めくくることができれば、どんなにいいことだろう。しかしそれは許されない。『夜』の結末は違っているからだ。アウシュヴィッツからグライヴィッツ、そしてブーヘンヴァルトへの「死の行進」をも生き延びたエリエゼールではあったが、解放後、中毒による大病を患い、2週間生死をさまよう。ようやくベッドから起き上がれるようになった少年は、病室の壁に掛った鏡を覗くところで『夜』は終わる。その最後の二文が、「鏡の奥から、死体が見つめていた。私の目に映ったそのまなざしは、もはや私から離れない」⁽²⁴⁾なのである。

表現が簡潔であればあるほど、覚醒がもたらす万感の思いが読者に伝わってくる。「死体が見つめていた」——この文にいったいどれだけの思い(感情と思考)が込められているのか！ この文の意味の確定を妨げているのは、この文に込められた多義性なのである。『夜』をこの場面で終わらせたのはミニユイ出版社のジェローム・ランドンで、あとに続いていた現状にかんする考察や瞑想を著者に削除させたのだという⁽²⁵⁾。編集者としての眼識の高さを示すものだろう。

話を元に戻さねばならない。最後の文が読者に思い起こさせるのは『夜』の冒頭にある、エリエゼール少年のユダヤ神秘思想の師モシェ・ル・ブドーの言葉である。彼はこうくり返していたという。「人間が問い、神が答える。しかしその答えがわれわれには理解できない。」⁽²⁶⁾そして、この人間と神との対話が、あの12歳くらいの美少年の死の場面へと読者を導くのである。

(7) 「神はどこにいる？」(p. 125)

第 52 作業班の監視長の小姓で、「12 歳くらいの収容所では信じられないほど繊細で美しい顔をした少年」⁽²⁷⁾が、あらぬ嫌疑をかけられて絞首刑にされる。囚人たちは、刑執行後も半時間以上息のあったその少年をまじかに見ることを強制される。絞首刑になった人々を見慣れていたはずなのに、囚人の一人が堪らずこう叫んだのである。

一神はどこにいる？

私は内なる私の声がこう答えるのを感じた：

一神はどこにいるかって？ ここにいる
 じゃないか—彼はここに吊るされているよ、
この柱に……⁽²⁸⁾

ここで注意しなければならないのは、エリエゼールの内なる声である。「神はどこにいるかって？」の「神」は、小文字の「il」になっている。ほかのところでは、「彼」=神は大文字の「II」である。しかるにここでは、神が小文字の「彼」、すなわち人間と同等になって吊るされているのである。

おわりに

エリー・ヴィーゼルが書き残した『夜』は、文学作品であると同時に、証言であり、歴史的記述でもある。「人類史の悲劇」であるアウシュヴィッツの問題はあまりに大きい。しかしあえて、『夜』のテキスト分析を試みた。今後の研究には、さらなる繊細さと忍耐が要求されよう。

注

- (1) Elie Wiesel, *La Nuit*, Les Editions de Minuit, 1958/2007, p. 9.
- (2) *Ibid.*, p. 10.
- (3) *Ibid.*, p. 10.
- (4) *Ibid.*, p. 11.
- (5) *Ibid.*, p. 39.
- (6) 《un autre langage》の訳語として、「別の言語」がよいだろう。しかしながら、本稿のタイトルでは、「新たな言語」とした。
- (7) *La Nuit*, Minuit, 2007, pp. 11-13.
- (8) *Ibid.*, pp. 13-14.
- (9) *Ibid.*, p. 14.
- (10) *Ibid.*, p. 14.
- (11) Elie Wiesel, *Tous les fleuves vont à la mer Mémoires*, Editions du Seuil, 1994.
- (12) *La Nuit*, Minuit, 2007, pp. 18-19.
- (13) *Ibid.*, p. 20.
- (14) *Ibid.*, pp. 20-21.
- (15) *Ibid.*, pp. 21-23.
- (16) マリエル・シュヴァリエ ギヨーム・ブレル監修『フランスの歴史【近現代史】—フランスの高校教科書 19 世紀中頃から現代まで』(福井憲彦監訳 遠藤ゆかり 藤田真利子訳), 明石書店, 2011 年。
- (17) *La Nuit*, Minuit, 2007, p. 22. ちなみに 2017 年現在までの入場者数は、記念博物館の公式サイトによれば、4000 万人を超えるという。
- (18) 照合するテキストとして、新版と旧版、以下の 2 冊を使用した。
 新版：*La Nuit*, Editions de Minuit, 1958/2007.
 旧版：*La Nuit*, Editions du Seuil, 1958.
- (19) 括弧内の数字は、*La Nuit*, Minuit, 2007 のページ数を示す。以下、同様。
- (20) 《orphelin》は、以下の表現で現れる。
 - ① モシェ・ル・ブドーは「孤児の臆病さで」人々の笑いを誘った (p. 31)。
 - ② エリエゼールの父親が選別されたことを知って、友達のチビやヨッシだけではなく、カボまでが、エリエゼールを「孤児のように」やさしく扱った (140)。
 - ③ 眠ったら死が待ち受けている状況下で、エリエゼールに耳元で「起きて」とささやかれて、ハッと目を覚ましたときの父親のまなざしを「孤児のまなざし」とある (162)。
 - ④ ブーヘンヴァルトに向かう貨車のなかで死んで、車外に放り出された人々：「ポーランドの雪の積もった野原に埋葬もされない数百人の裸の孤児を残して、列車は再び動き出した」(176)。

(21) *La Nuit*, Minuit, 2007, p. 170.

(22) *Ibid.*, p. 81.

(23) *Ibid.*, p. 118.

(24) *Ibid.*, p. 200.

(25) *Ibid.*, p. 14 et p. 17.

(26) *Ibid.*, pp. 33-34.

(26) *Ibid.*, p. 122.

(28) *Ibid.*, p. 125.

『夜』の2007年版と1958年版の比較表

新版				旧版			
章	頁	行		章	頁	行	
	31	1	Moshé-le-Bedeau		15	1	Moché-le-Bedeau
	32	5	J'avais presque treize ans.		16	4	J'avais douze ans.
	33	4	un maître		17	1	un Maître
	33	5	Moshé-le-Bedeau		17	2	Moché-le-Bedeau
	34	6	Moshé		18	1	Moché
	34	26	Moshé-le-Bedeau		18	23	Moché-le-Bedeau
	35	6	Moshé-le-Bedeau		19	2	Moché-le-Bedeau
	35	16	Moshé-le-Bedeau		19	9	Moché-le-Bedeau
	36	6	Moshé-le-Bedeau		19	29	Moché-le-Bedeau
	36	22	Moshé-le-Bedeau		20	16	Moché-le-Bedeau
	37	1	Moshé		20	23	Moché
	37	28	Il ferma les yeux		21	20	Il ferma ses yeux
	38	23	Rabbi		22	14	Rabbin
	39	6	en fleurs		22	25	en fleur
	39	23	Moshé-le-Bedeau		23	12	Moché-le-Bedeau
	40	12	parler des fascistes		23	29	parler des Fascistes
	40	25	Les fascistes		24	13	Les Fascistes
	41	27	à madame Kahn		25	14	à Madame Kahn
	41	28	une boîte de chocolats		25	14	une boîte de chocolat
	42	6	les fascistes		25	21	les Fascistes
	42	8	(8-9 行間に空きなし)		25	24-25	(2 行の空きあり)
	42	14	chaque appartement		26	1	chaque appartement de rabbin
	42	23	Pâques		26	9	Pâque
	43	4	Moshé-le-Bedeau		26	18	Moché-le-Bedeau
	44	22	《normale》		28	4	normale
	45	18	qui régnaient dans le ghetto :		28	29	qui régnaient sur le ghetto :
	45	20	Deux samedis avant la Pentecôte		29	1	Le samedi précédant la Pentecôte
	48	3	le président du Conseil juif		31	8	le président du Conseil Juif
	50	21	au Conseil juif		33	25	au Conseil Juif
	53	6	Voilà le grand rabbin		36	5	Voilà le rabbin
	55	4	comme un rêve aux premières heures de l'aube		37	27	comme un rêve, aux premières heures de l'aube
	56	3	maison où j'avais passé des années		38	25	maison, où j'avais passé des années
	56	16	Je regardais ma petite soeur		39	9	Je regardai ma petite soeur
	60	18	le Conseil juif		43	7	le Conseil Juif
II	62	11	s'attouchaient	II	45	11	s'accouplaient

新版				旧版			
II	65	16	Ce n'est rien, maman!	II	48	11	Ce n'est rien, Maman!
	67	4	madame Schächter		49	25	Madame Schächter
	69	12	madame Schächter		51	29	Madame Schächter
	70	6	madame Schächter		52	21	Madame Schächter
III	72	1	la main de maman	III	53	17	la main de Maman
	75	5	Elle m'avait semblé durer une éternité.		57	1	Elle m'avait semblé une éternité.
	76	23	de notre époque		58	19	à notre époque
	78	12	l'ange de la mort		60	4	l'Ange de la mort
	79	2	ma foi		60	21	ma Foi
	79	24	des loques: celle de la nudité		61	14	des loques. Pour nous, c'était la véritable égalité: celle de la nudité
	80	6	dans le <i>Sonder-Kommando</i>		61	25	dans la <i>Sonder-Kommando</i>
	80	7	le kommando		61	26	le Kommando
	81	6	le frère du Rabbi de Sighet		62	23	le frère de Rabbin de Sighet
	81	10	Dommage pour les autres...		62	27	Dommage pour les larmes...
	81	28	dans le monde du néant		63	15	dans le monde-du-néant
	84	21	un kapo		66	3	un Kapo
	86	4	les kapos		67	13	les Kapos
	86	9	(9-10 行間に空きなし)		67	19	(1 行の空きあり)
	89	3	dans le block		70	5	dans le bloc
	89	5	—Plus vite, hurlaient les gardiens.		70	7	—Plus vite, hurlaient nos gardiens.
	89	8	un nouveau block		70	11	un nouveau bloc
	90	1	dans le block 17		71	2	dans le Bloc 17
	90	27	A l'ombre du block		71	27	A l'ombre du bloc
	91	9	Je devins A-7713		72	7	Je devins A-7713
	91	11	Les kommandos de travailleurs		72	9	Les commandos de travailleurs
	91	18	tous les blocks		72	15	tous les blocs
	94	10	notre chef de block		75	4	notre chef de bloc
	96	5	Où est maman		76	29	Où est Maman
	96	12	(12-13 行目に空きなし)		77	7-8	(2 行の空きあり)
	96	17	le secrétaire du block		77	13	le secrétaire du Bloc
	96	22	《Le travail, c'est la liberté ! 》		77	18	《Le travail, c'est la liberté》
IV	98	2	《bien vêtus》	IV	79	2	bien vêtus
	98	3	entre les blocks		79	3	entre les blocs
	98	10	dans ses yeux bleu cendré		79	10	dans ses yeux bleus cendrés
	98	14	Après qu'on nous eut donné		79	14	Après qu'on nous eût donné
	98	17	dans des kommandos de travail		79	17	dans des commandos de travail
	98	18	dans un block		79	18	dans un bloc

新版				旧版			
IV	99	1	les kommandos	IV	79	19	les commandos
	99	4	quel kommando de travail		80	3	quel commando de travail
	99	5	dans quel block		80	4	dans quel bloc
	99	9	au kommando de la construction		80	9	au commando de la construction
	99	22	je l'appris plus tard.)		80	22	je l'appris plus tard).
	100	13	Mais contre rien, cette fois.)		81	12	Mais contre rien, cette fois).
	101	8	à l'entrée du premier block		82	6	à l'entrée du premier bloc
	101	9	le block de l'orchestre		82	7	le bloc de l'orchestre
	101	15	: 《(…) gauche, droite.》		82	13	: 《(…) gauche, droite》.
	102	26	compter les boulons, des ampoules		83	22	compter des boulons, des ampoules
	104	8	ses rêves kabbalistiques		84	30	ses rêves cabbalistiques
	104	15	le block des musiciens		85	7	le bloc des musiciens
	104	22	《son》block		85	14	《son》bloc
	105	1	nous rentrions du dépôt		85	21	nous rentrions de dépôt
	105	2	auprès du secrétaire du block		85	22	auprès du secrétaire du bloc
	105	3	A-7713		85	23	A-7713
	105	8	au block des malades		85	28	au bloc des malades
	109	9	(9-10 行間に空きなし)		89	24	(1 行の空きあり)
	113	24	le kapo assembla		94	7	le Kapo assembla
	113	27	Le kapo tint un bref discours :		94	10	Le Kapo tint un bref discours :
	114	6	A-7713		94	17	A-7713
	114	22	Le kapo attendait.		95	3	Le Kapo attendait.
	115	2	Ce devait être le kapo.		95	11	Ce devait être le Kapo.
	116	1	au block de la grasse matinée		96	11	au bloc de la grasse matinée
	116	5	à l'intérieur des blocks		96	15	à l'intérieur des blocs
	116	12	en dehors de son block		96	22	en dehors de son bloc
	116	26	la porte du block 37		97	7	la porte du bloc 37
	118	9	sur les blocks		98	15	sur les blocs
	118	22	Tout le monde sortit des blocks.		98	28	Tout le monde sortit des blocs.
	119	2	accompagné de son adjoint et du kapo		99	6	accompagné de son adjoint et du Kapo
	119	7	Les chaudrons furent rapportés		99	11	Les chaudrons furent ramenés
	119	9	L'entracte était terminé.		99	13	L'entr'acte était terminé.
	120	24	Au nom du <i>Reichsfuhrer</i> Himmler		100	26	Au nom de Himmler
	120	25	le détenu n°...		100	26	le détenu N°...
	121	14	Le kapo voulut		101	14	Le Kapo voulut
	122	15	L' <i>Oberkapo</i> du 52 ^e kommando		102	13	L' <i>Oberkapo</i> du 52 ^e kommando
	122	22	Un garçon d'une douzaine d'années		102	20	Un enfant
V	126	16	De tous les blocks	V	107	16	De tous les blocs

新版				旧版			
V	127	12	chefs de block	V	108	10	chefs de bloc
	127	12	kapos		108	10	Kapos
	127	26	jour et nuit les jours de Sabbat		108	24	jour et nuit, les jours de Sabbat
	129	24	leurs blocks		110	16	leurs blocs
	130	3	près du block		110	22	près du bloc
	131	19	dans le même block		112	6	dans le même bloc
	131	23	mon nouveau block		112	10	mon nouveau bloc
	132	4	il inscrirait son numéro :		112	18	il inscrivait son numéro :
	132	16	Les kapos		112	30	Les Kapos
	133	21	dans la pièce d'à côté		114	5	dans la pièce à côté
	134	14	Tous les détenus du block		114	25	Tous les détenus du bloc
	134	20	Le chef de block		115	1	Le chef de bloc
	134	25	au chef de block		115	6	au chef de bloc
	135	1	<i>Stubenelteste</i> , kapos, contremaîtres		115	10	<i>Stubenelteste</i> , Kapos, contremaîtres
	136	4	Le chef de block apparut		116	11	Le chef de bloc apparut
	136	24	vers le block 36		117	1	vers le bloc 36
	138	21	loin du block		118	25	loin du bloc
	140	2	改行なし (mon fils. Nous n'avons pas)		120	3	改行 (mon fils./Nous n'avons pas)
	140	15	(15-16 行間に空きなし)		120	17	(1 行の空きあり)
	140	18	Le kapo, lui aussi, essayait		120	20	Le Kapo, lui aussi, essayait
	141	4	Le block 36		121	4	le bloc 36
	141	26	dans le block		121	26	dans le bloc
	143	6	Alors, il s'en fut		123	3	Alors il s'en fut
	144	1	A Noël et le Jour de l'An		123	26	A Noël et le jour de l'An
	144	10	les doigts de pied		124	7	les doigts du pied
	145	3	L'Allemagne n'a pas besoin des Juifs malades.		124	28	L'Allemagne n'a pas besoin des juifs malades.
	145	8	qui sortaient de dessous terre		125	3	qui sortaient de dessous de terre
	145	19	(19-20 行間に空きなし)		125	14	(1 行の空きあり)
	146	8	ouvrant les yeux		126	1	ouvrant mes yeux
	147	16	dès le lendemain		127	8	dès le surlendemain
	148	12	Ses yeux (···) se fixèrent.		128	3	Ses yeux (···) me fixèrent.
	149	6	les blocks		128	25	les blocs
	149	11	Block après block.		128	1	Bloc après bloc.
	149	16	les blocks-hôpitaux		129	5	les blocs-hôpitaux
	150	2	les fenêtres des blocks		129	19	les fenêtres des blocs
	151	1	neuf jours après l'évacuation		130	17	deux jours après l'évacuation
	151	6	à mon block		130	22	à mon bloc

新版				旧版			
V	151	8	Le chef de block	V	130	24	Le chef de bloc
	152	11	on eut dit (on eût dit の誤植)		131	24	on eut dit
	153	4	Le chef du block		132	14	Le chef du bloc
	153	5	nettoyer le block		132	15	nettoyer le bloc
	153	12	Le block		132	16	Le bloc
	153	19	par blocks		133	1	par blocs
	153	28	Les premiers blocks		133	9	Les premiers blocs
	154	2	la sortie des cinquante-six blocks		133	11	la sortie des cinquante-six blocs
	154	7	block53...block55...		133	16	bloc53...bloc55...
	154	8	—Block57		133	17	—Bloc57
VI	157	19	vers le bord de la route.	VI	137	17	vers le bord de la route...
	161	6	pour qu'elles ne gèlent pas		140	25	pour qu'elles ne gèlent pas
	162	18	Il entrouvrit les paupières		142	6	Il entr'ouvrit les paupières
	163	12	C'était Rab Eliahou		142	27	C'était Rabi Eliahou
	163	15	même les kapos		142	30	même les Kapos
	163	15	les chefs de block		142	30	les chefs de bloc
	164	11	Rab Eliahou		143	24	Rabi Eliahou
	164	20	Rab Eliahou		144	3	Rabi Eliahou
	164	26	Rab Eliahou		144	9	Rabi Eliahou
	164	28	boitant		144	11	boitant
	165	12	Rab Eliahou		144	23	Rabi Eliahou
	165	18	Rab Eliahou		144	29	Rabi Eliahou
	167	9	Des kapos nous installèrent		146	17	Des Kapos nous installèrent
	168	1	(...) respirer. Moi-même j'étais		147	7	(...) respirer. Mais moi-même j'étais
	168	2	sous le poids d'un autre corps.		147	8	sous le poids d'autres corps.
	171	20	que les nazis n'auraient pas le temps		150	21	que les Nazis n'auraient pas le temps
VII	176	2	Ou des hommes s'approchèrent	VII	154	29	Ou deux hommes s'approchèrent
	176	13	mon père entrouvrit ses paupières		155	12	mon père entr'ouvrit ses paupières
	179	21	J'avais seize ans.		158	16	J'avais quinze ans.
	180	17	—Shlomo, je faiblis.		159	10	—Chlomo, je faiblis.
	180	24	Shlomo!...		159	17	Chlomo!...
VIII	183	5	: «En rangs par cinq.»	VIII	163	5	: «En rangs par cinq».
	183	5	«Par groupes de cent.»		163	5	«Par groupes de cent».
	183	6	«Cinq pas en avant.»		163	6	«Cinq pas en avant».
	183	15	dans les blocks		163	15	dans les blocs
	184	25	J'aurai pleuré de rage.		164	24	J'aurais pleuré de rage.
	186	22	à ne plus m'occuper que de moi-même.»		166	17	à ne plus m'occuper que de moi-même».
	187	15	Il était étendu sur la planche...livide,		167	10	Il était étendu sur la planche, livide,

新版				旧版			
Ⅷ	187	22	regagner les blocks	Ⅷ	167	17	regagner les blocs
	188	16	le nettoyage des blocks		168	8	le nettoyage des blocs
	189	22	avec un détenu de ce block		169	13	avec un détenu de ce bloc
	190	20	dans le block		170	9	dans le bloc
	191	4	(4-5 行間に空きなし)		170	22-23	(2 行空きあり)
	191	19	Puis ils se mirent en colère. Ils		171	8	Puis ils se mirent en colère: ils
	192	13	le responsable du block		171	30	le responsable du bloc
	193	17	je quittai le block		173	1	je quittai le bloc
	193	20	dans le block		173	4	dans le bloc
	193	24	Devant le block		173	8	Devant le bloc
	194	9	: 《Eliezer.》		173	21	: 《Eliezer》.
	194	20	C'était le 28 janvier 1945.		174	2	C'était le 28 janvier 1945.
	194	23	le 29 janvier		174	5	le 29 janvier
	194	27	Il n'y eut pas de prière sur sa tombe.		174	9	Il n'y eut pas de prières sur sa tombe.
Ⅸ	196	2	jusqu'au 11 avril	Ⅸ	175	2	jusqu'au 11 avril
	196	17	dans le block		175	17	dans le bloc
	197	15	à votre block		176	12	à votre bloc
	198	8	Le 10 avril		177	4	Le 10 avril
	198	17	On regagna les blocks.		177	12	On regagna les blocs
	199	4	dans le block		177	26	dans le bloc